



Title	眼の記録
Author(s)	山口, 良臣
Citation	デザイン理論. 2008, 53, p. 128-129
Version Type	VoR
URL	<a href="https://doi.org/10.18910/53491">https://doi.org/10.18910/53491</a>
rights	
Note	

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

## 眼の記録

山口良臣／名古屋市立大学

3年ほど前のことだが、どこかの洗面所で鏡を見て驚いたことがある。両眼の中心に光の輪があった。円形の鏡の周囲をリング状の照明器具が取り囲んでいて、その光が瞳に映り込んでいた。それ以来、瞳には何がどのように映りこんでいるのかが気になって、自身の眼を撮影し始めた。

初めはデジカメで撮影していたのだが、小型のビデオカメラを顔に装着する装置を作って、ビデオ撮影も始めた。2006年の個展では、写真作品とビデオ作品を、同年の日本映像学会の大会では、ビデオ作品を発表した。図1は当時発表した写真で、通天閣が映り込んでいる。

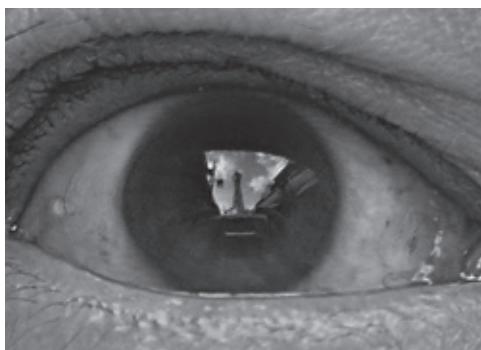


図1 2006.1.28 通天閣

当時の作品を眺めていると、それらはまず、眼の写真ないしは映像で、瞳に映りこんだ像に関心が向くのは、どうしても後回しになってしまう。大写しになった眼は、やはり強烈な印象を与えてしまう。

瞳に映りこんだ像に焦点を当てるなら、まずはその像に注意が向くようにした方がよいのではないかと、見ているうちにそれが瞳に映った像であることに気付くといった作りの

方が、重層性をより強く感じさせられるのではないかと、今回の制作に当たって初めに考えたのは、そんなことであった。眼から数センチの距離でアップの画像が撮れるようになったという機材の問題も大きい。今回発表する写真は、小型のHDビデオカメラで動画撮影し、そこから静止画を切り出してトリミングしている。図2が今回撮影に使ったビデオカメラで、眼の位置を固定するためのガイドが取り付けられている。



図2 撮影装置

では、何を写すのか、それが一番の問題であることに変わりはない。以前は、撮影対象を求めて出掛けるようなことをしていたのだが、むしろ日常生活の中で何か見つからないか、ふと眼についたものをメモするような感じで、あるいは日記のような感じで記録できないか、そんなことを考えながら、今回は制作した。したがって、特別なものが映っているわけではない。その日、私の眼には、確かにそれが映り込んでいたという記録であり、証拠写真でもある。



2008.6.12



2008.6.14



2008.6.15